

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

去年の暮れ、勤め先での話である。

登すぎ、外線の鳴った電話をとりあげると、若い女性の声が某テレビ局を名乗った。私に連絡をとりたいというので、当人ですと答えかけたところ、「あ、いま電話がかかってきたので、あとでかけ直します」とソクザに切れた。このあいだ、ほんの十秒ほど。

局の正社員らしいが、彼女の周囲には電話にでる人間がいないのか。それともよほど重要な人物か、恋人あたりの電話でも待っていたのか。いずれにせよ、そっちから電話しなくてそりゃないだろうと思っていたら、三十分ほどしてまたかかってきた。今度は「あ、ご本人でしたか」と、てきぱきテレビ出演の依頼である。

これは結局 やつかないことが多くお断りした。電話の応対のためではない。二度めの電話のあとは、むしろ好感をもったくらいである。あまりにあつげらんとして、素直な明るい声だった。

こういふときちよつと困るのは、^①オジサンの常識をご指摘申しあげるべきかどうか、という点である。忠告したほうが親切なのだろうが、ご期待にそえず申しわけないといっただけで私は受話器をおいた。

若い女性とのやりとりで、こういう経験に遭遇することが多くなった。無礼ということでなく、困惑させられるという程度の意味である。無礼なんかは私自身がしょっちゅう働いている。

この電話で思いだした話がある。数年まえ、これも勤め先の仕事の関係上、あるギャラリーにスケジュール案内を電話で依頼した。するとこれまたお嬢さまらしい涼やかな声が、正確を期するためファックスで住所、氏名を送っていた。だきたいとしごくまっとうな対応である。感心して、丁寧な依頼文を送付した。素早い対応で、二、三日後にはもう案内がとどいた。それを見て一瞬、首をひねり、直後にバカ笑いした覚えがある。封書にある宛て先の敬称が「拝様」

以前から、チヨウコウはあつた。身の周りのあれこれについては、おそろしく無頓着な性分を自覚してはいたのである。

たとえば、私にとって去年最大の事件といえば、新しい靴の購入であった。なにをたいそうなといわれそうだが、私は数年に一度しか靴を買わない。数年間、おなじその一足でとおす。たしか乱歩賞をいただいたとき新調を考え、まだ一年しかはいていないのだからとやめた記憶があるから、去年までの靴は足かけ六年、使用に耐えたということになる。

もっとも最後のころは耐えたというほどではなかった。一年以上まえ、靴底に穴が開いたからだ。当然、雨の日は靴下が濡れる。そのときだけは新しいのを買ったときやよかったと後悔するものの、晴れば忘れる。その繰り返えしが一年近くつづいた。

ようやく買いかえを決断したのは、去年の秋だった。雨の日、勤め先でさらに穴の拡大した靴を乾かしていて「なんですか、それ」と若い女性の��ひんしゆく感を買ったのだった。事態はそのころ、いったん雨が降れば、靴下グショ濡れというあたりまで進行していた。

こんなバカバカしい事態がつづいたのも、靴がボロになったから、新品を買うという発想に結びつかないからである。ただただ買い物がめんどつくさい。それだけが理由だ。

たまたまこれは去年の話だが、ずっと以前からあつたこういう傾向が対人関係におよんだのかもしれない。

どういう神経をしているのか自分でも不思議だとは思ふ。だが、めんどろが嫌になつたのだというしかないのだ。しかしよく考えてみると、こういう腰の引けた姿勢——対人関係であれ、身の周りのあれこれであれ——は、人間としていい加減になつた証拠かもしれない。むかしからいい加減でだらしない人間ではあつたが、それがいつそうイチジルしくなつただけなのかもしれないと思ふ。

になっていたのだ。これはファックス送信時、名前のあとに「拝」をつかったのが原因だった。彼女はそれを氏名の一部と思いこんだらしい。

以後、二、三ヵ月に一度、案内が送られてくるようになり、その際、印字シールにあるハイサマを見るたび、複雑な気分になったものである。^②辞書にもある事実をお知らせしたのかどうか、何度か考えはしたが、結局、実行までにはいたらなかった。

だいたいハイサマを笑う資格など私にはないのだ。私もこれくらいは無知は堂々、活字で天下に晒さらしてきた。具体的にはいいたくないが、大恥をかき、あとで冷や汗をかいたことは数知れない。そういう人間だから、忠告などという恐れ多い所業は身にあまる。

それに経験でいえば、まちがいを指摘したところで彼女が私に感謝することはまずないだろう。それより恥をかかせた人間として記憶するにちがいない。それなら、いずれ気づいて注意するどこかのだれかにまかせたほうがいい。どうせババ抜きなのだから、他人まかせのほうがよろしかろう。

③ つと単純な性分に根ざしたところがあるような気がしないでもない。
めんどくさいのである。

ハイサマに実害がない以上、放置しておいて世間になんの影響やある、と思うところがある。いや、害があつてさえ、ムエキな労力は敬遠したい。対人関係のやつかいからは、できるだけ逃れたいと思うようになった。いまや、これがほとんど本能に近い。

むかしはどこちかというところ、かなりケンカつ早いほうだった。周りに髪の毛
ひと筋ほどの隙があれば、必ずイチヤモンをつけた。あつちこつちで衝突し、
上司から「おまえ、ケンカがシユミカ」と訊かれたことがある。

ところが四十歳を超えたあたりから、これが一変した。ひと様との摩擦を極力、回避するようになった。つまり八方美人方向にコースが変化していったわけである。理由はよくわからないが、おそらく年齢と無縁ではないだろう。

そういうえは、そういう自分は棚にあげ、人のいい加減さに腹のたつた話もある。さつきは若い女性にふれたので、公平を期すためというわけでもないが、今度は男性である。

なぜか直木賞をいただくことになって、以来、けっこうな数の取材申し込みがあった。広報室というセクションにいた立場上、たいていは昼に勤め先でうけたのだが、④二足のワラジをはいているから、これが残業となつてはねかえつてくる。死ぬ思いであつた。その取材攻撃最盛期のころの話である。

ある雑誌から電話があり、かなり若い男性の声がインタビューしたいという。ついでには夕方に時間をとってほしいとのことである。できればその時間帯は避けたかった。こちらは残業を避けるため、たいがい昼メシを抜いて、昼の休憩時間に應對していたからだ。しかし、先方にもいろいろ事情があるのだらうと考え、内心は不承不承ながらも愛想よくオーケイの返事をかえした。

当日、約束の午後五時になった。仕事をしつづけていたが、いっこうあらわれないし連絡もない。終業の五時半をすぎたころ、確認のため、先方に電話した。すると当の本人が電話にでて無邪気な声でこういつた。「あつ、きょうは僕、忙しいので、また後日ということだ」。こちらが啞然^{あぜん}としているごく短い時間がすぎ、気がつくとも電話は切れていた。詫^わびのひとも言もない。

次の瞬間 私はキレていた。リダイヤルを押した方がでたとき、いきなり「てめえ、このヤロー」と怒鳴^{どな}った。じつに十年はつかったことのない呼びかけである。十分ほど一方的に怒鳴りまくり、いくぶんスッキリして電話を切ると、

⑤ いなか になってからの私しか知らない周囲が、いったいな事が起きたのかと訝^{いずか}しげにたずねてきた。最近の若いヤツつてホントいい加減なんだから、と答え私は早々に退社した。

翌朝、会社にでると、訳を聞いていた同僚が「きのう、例の若いのが来たよ」という。あの電話のあと、一時間ほどしてあらわれ、二時間ほど私のデスクで手紙を書いていたらしい。二十代前半の青年だったという。「すんげえシヨボシとしてたぜ。許してやれよ」。デスクを見ると、クッキーの箱と詫び状が残

っていた。詫び状のほうはぎこちないものの誠意のじむ文章である。こういう文章を書く人間が、どうしてあんないい加減な仕事の姿勢でいるのかと訝しかった。

あらためて詫びの電話もきた。いったん怒っても私はすぐそれを忘れる。久しぶりに血が騒いでおもしろかったと私は答えた。周りに配ったクッキーもおいしかったとつけくわえた(事実、そのクッキーはたいていのことが許せるほどうまかった)。青年は恐縮した声で、今後はずっと当誌を送らせていただきますといった。あまり縁のない雑誌だからと適当に聞き流したのだが、その約束を彼は律儀に守った。毎週、手書きで送付者個人名の入った雑誌が勤め先に送られてくるようになった。それがとどくたび、もういいのと思ったが、こちらから連絡はしなかった。⑥ そのうちだんだん、こちらが無礼を働いている気分になってきたが、それでも連絡しなかったのは、めんどろだったからである。

私のほうがまたいい加減な人間に舞いもどっていたのだ。

二年ほどたったころ、最後の送付があった。異動があつて、その雑誌からはなれる旨の手紙が添えてあつた。だから彼とは一度も顔をあわせていない。

この間に私もセクシオンを異動した。引き継ぎの際、くだんのギャラリー、ハイサマのお嬢さまにも以後、案内は後任者に送っていただきたいとファックスを送った。その際、名前のあとに「拝」は使用しなかった。彼女がそれを見て「拝」の意味を知ったかどうか。これだけは、いまだちよつとした興味がな

(藤原伊織「ハイサマのお嬢さま」)

問一 傍線部イのカタカナを漢字に直しなさい。

問二 傍線部①「オジサン的常識」とは、ここではどういうことですか。次の中から適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア ほんの十秒で「あとでかけ直します」と電話を切るのは、無礼であること。

イ あまりに明るく「あとでかけ直します」と言われると、困惑させられること。

ウ 「あとでかけ直します」という場合は、ふつう十分以内でなければならぬこと。

エ 自分からかけたのに「あとでかけ直します」は、ふつう失礼であること。

問三 傍線部②「辞書にもある事実」とありますが、「拝」について説明した次の文の空欄に当てはまる語句を、十字以内で記しなさい。

自分の名前の下につけて を表す語。

問四 傍線部③「めんどろくさい」とありますが、そう感じるようになったのはどこに原因があると筆者は考えていますか。解答欄の形式に合うように、文中から十五字以内で抜き出しなさい。

問五 傍線部④「二足のワラジをはいている」とは、ここではどういうことですか。二十字以内で説明しなさい。

問六 空欄⑤に当てはまる四字熟語を文中から抜き出しなさい。

問七 傍線部⑥のように感じたのはなぜですか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア こちらも言い過ぎたとまだきちんと伝えていないままだったから。

イ 相手のきちんとした態度に对应していないように感じられたから。

ウ 読みもしない雑誌をさも読んでいるかのような顔をしているから。

エ ただではない雑誌を長期にわたり無料で送ってもらっているから。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

文彦、俊之、玲子とはかつて同じ学生劇団に所属していた。俊之は玲子と結婚し、一人息子の良太も生まれたが、玲子は病気でこの世を去ってしまう。俊之は自分の事務所へ勤く文彦にたびたび良太の世話を頼む。文彦は良太に釣りを教え、良太はどんどん釣りが好きになっていった。ある日、良太は初めて俊之とともに三人で釣りに行く約束をしたが、当日、舟の出発時刻に俊之は姿を見せず、文彦と二人でかけることになった。

間違いない。オニカサゴだ。

文彦は確信した。同じく化け物サイズに成長する魚で、カンコと呼ばれるカサゴに似た大魚がいる。こいつも当たりは激しいが、百メートルの水圧の変化にはかなわない。カンコならそろそろ浮き袋が膨らみ、弱々しい泳ぎになっていくところだろう。なのにこの魚は。

「きつとオニだぞ」

良太にそう呼び掛けた時だった。

「ボクッ！ 来てんぞっ！」

船頭が叫んだ。

何のことかわからず、文彦は一瞬竿先から目をはずした。

タモ網を持ったまま立っている良太。

その後で、キーパーに固定させたままの良太の竿が……斬りこんでいた！

「良太！」

うえっ、と声を引きつらせ、良太がタモ網を放り出した。近くの釣り客がそれを受け取る。

「どうする父ちゃん。息子さんの、代わりに上げてやろうか」

別の釣り客が、文彦に近付いてきた。良太は釣り座に戻ったものの、キーパーから竿をはずすことができない。

ゴツッ。ゴゴツ。

その間にも文彦の獲物は必死に抵抗する。リールの巻き上げが止まり、竿がギツと音を立てる。

「この子、作文書かなきゃいけないんで」

言いながら文彦は自分の水深計を見る。九十七メートル。

「ばらしてもいいから……良太、やってみろ！」

左脇で竿尻を挟みこんだものの、良太はどうしたらいいのかわからない様子だった。膝も腿も震えている。

「良太、とにかく合わせろ！ 合わせて最初からスイッチを入れちまえ！」

その瞬間にも文彦の竿がしなる。八十二メートル。真ん中から折れそうだった。それと同じ角度で良太の竿も海に刺さっている。

「合わせるの？」

「合わせるんだ！」

ううっ、と良太が妙な唸り方をした。竿をキーパーからはずそうとしている。

「ボクッ、振り上げろ」

操船しながら船頭が叫ぶ。

しかし竿先は上がらず、つんのめった良太は船べりに激突した。膝を思い切り打ち、竿を持ったまま海に落ちそうになる。背後の釣り客が慌てて良太の腰に手を回した。

「父ちゃん、いいのかい」

「作文があるんで」

「行きたくないって言ってる！」

その言葉とともに、良太の竿が何とか振り上がった。

ゴツッ、ゴツゴツッ。

文彦の竿も抵抗が続く。七十二メートル……六十九メートル。

見るに見かねた釣り客が良太の電動リールのスイッチを押した。ギュギュギュッとモーターが始動し、竿がグッ、グッと段を付けて折れ曲がる。それを良

太は何とか堪えた。ちよつとでもバランスを崩せば船べりを越えそうになる。

その状態で懸命に腰を落とした。

「良太、ゴツゴツ来てるか」

「……」

鼻にしわを寄せ、目を瞬かせて竿にしがみついている。竿先が何度も波濤を叩く。

「こりや、すごい ③ になるな」

タモ網を受けた釣り客が笑った。

文彦はだが笑えない。良太もちろん笑えない。いや、本当のところ誰も笑っていないかった。

「良太、こっちはもうすぐ上がるからな。とにかく頑張れ」

三十五メートル……二十四メートル。

つくづく凄まじい魚だと思う。ここに来てまた爆発的な暴れ方をしている。

それを竿で溜めこんでいなす。横で踏ん張っている良太を見ながら。

十七メートル……十三メートル。

ゴツッ。ゴツゴツッ。

八メートル……五メートル。

モーターが止まった。ここから先は手動で巻き上げる。

「でっけえ！」

船頭が最初に叫んだ。タモ網を構えた釣り客がその声に続いた。リールを巻き上げようとしている文彦も。

「おおっ」

波濤の下数メートルで、**A** がもがいていた。良太の胸ほどもあった。

姿が見えてもまだ果敢な突進を繰り返している。

文彦は唾を飲み、息を止め、残りの数メートルを慎重に巻き切った。そして竿をキーパーに固定し、張りつめた道糸を手でたぐった。目の前の波間に泡が

弾ける。気泡を吐き始めている。

「すごい、牛みたいだ」

腰を落として耐えている良太からも見えたのか、喘ぎながらやつと口を開いた。たしかにこの魚は赤いブルだ。針をはずそうともがく口がやたらに大きい。ブホッ、ブホッと波を噛んでいる。

そこへタモ網が入った。ペテランの釣り客らしく、迷いのない入れ方だった。

「重い、こりや重い」と一声あり、柄がしなった。

ドスン。ドサドサドサッ。

刺だらけの、**B** が放り出された。

甲板に核ができた。相模湾の景色が変わった。

ゆうに六十センチを越える **C** だった。バットでも噛み砕きそうな口を開き、胸鰭の毒針を振りかざしながら跳ねている。目に力が宿ったままだ。

「氣いつけてね、刺されないでね！」

船頭の声が硬くなった。周りの釣り客たちも一歩下がってこの巨大なオニに見入っている。

「**D** だな、こりや」

「記録とんなきやよう」

「一貫目あるんじゃねえか」

それぞれの感嘆があった。そこで文彦は **a** に返った。

「良太！」

ダ、ダ、ダッと断続的に締めこむ竿を十歳の少年が全身で受け止めていた。

b を食いしばって懸命に耐えている。

「どうだ」

「うん……うん」

お得意の言葉が出てこない。リールの水深計はもう七十メートルを切っている。

「二人でやれるか？」

「やる……やる」

釣り揚げたオニカサゴを放ったままにしているのが気になったが、文彦はタモ網を手にとった。

「行きたくないって言ってるか？」

「そんなんじゃない。怒ってる。もう、ばんばんに怒ってる」

鼻にしわを寄せてそれだけを言うのがやつとだ。

六十メートル……五十メートル……四十メートル。

魚の抵抗を必死にいなしている良太の横顔に、玲子が再び現われた。

稽古場で、顔に汗を浮かべたまま飲み物を差し出してきた玲子。

窓辺の光の中で、台本をゆっくりと読んでいた玲子。

文彦が俊之に罵倒された夜、横に並んで歩いてくれた玲子。

玲ちゃん……良太、今頑張ってるよ。

へ 中 略

「親子ですごいね、あんたたち」

周囲の釣り客が囁し立てる。

「よし、そこからは道糸をつかめ。引っ張られたら力を抜く」

オニが暴れ、竿先がまた垂直に突っこんだ。それを良太は左手一本でいなし、波を斬る道糸を右手でひつつかんだ。爪のちびたあの右手で。

「そうだ。もう少しだ。たぐって、たぐって」

気泡が弾ける。でかい。朱色の口を開き、船に齧り付かんばかりの勢いで縦に横に跳ねている。

「もう少し！」

波間にオニの顔が出た。

そこへ文彦のタモ網が撫で斬りで入った。

げ入れた。

「大丈夫か！」

良太のすぐ横の釣り客が声をかけてきた。船頭も操舵室から飛び出してくる。

「くそっ」

呻きながらがむ。立ち上がって喘ぐ。

良太は目をまん丸にして文彦を見ている。

何とか笑顔を作らなければと文彦は頬に力を入れる。だが、形になるのは唇だけで、それもすぐに歪んでしまう。五寸釘で手を刺されたかのようだ。その痛みが肘へ、腕の付け根へと上がってくる。それでも文彦は迅速に動き、良太が釣ったオニもタライに投げ入れた。

「すいません、処理がまずくて」

「刺されたの？」

「はい」

船頭が両手で顔を覆った。金髪が風でまくれ上がった。

「注意してって言ったでしょう」

「すいません」

「こんだけ客が乗ってつから、お客さんのためだけに船を戻すわけにはいかなんだよ。お子さんがやられたのならともかくさ」

「はい」

「応急処置はすつから。今しばらくちょっと耐えて」

焦った顔をして、また操舵室に走りこんでいった。

「ひこさん」

良太は棒立ちになっている。

「ごめんな、良太。やられた」

痛み、というよりはホネをえぐられる感じに近かった。灼熱の鉄棒でも差しこまれているようだ。お前は売れない俳優をずっとやってきたんだろう。こ

柄が湾曲し、タモ網が投げ出される。

ドスン、ドスンと派手な音を立て、これまた巨大なオニが甲板を叩いた。目を見開いてまわりを睨んでいる。背の毒針が真つすぐに立ち、宙を刺している。同時に良太が崩れた。

座席ではなく、甲板に直接尻をついた。

釣り客の何人かが拍手をしてくれた。

「やったな、良太！」

その時だった。船は舳先からうねりに乗るような形で持ち上がった。

傾いた甲板をタライや道具類が転がった。

放り出しておいた怪物も転がった。尻鰭で甲板を叩き、跳ねるように転がってくる。

ドスツ、ドスツ、ドスツ。

肉塊が転がるように怪物は文彦の足下をかすめた。

全身の毒針を奮い立たせながら。

すぐ先に、尻餅をついたままの良太がいた。

「危ない！」

船頭がそう叫ぶのと、文彦が手を出したのが同時だった。

④ 子牛のようなオニカサゴは良太の腿のすぐ手前で止まっていた。胸鰭の毒針を文彦の左手に打ち込みながら。

「お客さん！」

ああっ、と文彦はかがみこんだ。呻きが漏れた。

「……ひこさん」

尻餅をついたまま良太が後ろに下がった。

文彦はもう一度かがみこみ、くそつと唸った後で、右手の親指をオニカサゴの下顎に突っこんだ。唯一、毒針に触れずにオニを持てる場所だ。ドスドス暴れるオニをそのまま持ち上げ、良太のそばから引き離れた。そしてタライに投

の子に心配をかけさせるな。さあ、笑え。そう念じるのだが、座ったまま唸っているしかない。

「お客さん」

船頭が操舵室から降りてきた。手にポットとボウルを持っている。

「どう、痛い？」

「むちゃくちゃですよ」

「今から荒療治をするからね。オニの毒はハブと同じで神経毒ってやつなの。」

お客さんが刺されたところを今から熱い湯につけっから」

心配そうに見守っている釣り客たちがざわめいた。

「毒のタンパクを熱でやっつけちゃうから。その代わりお客さんはちょっと火傷するよ。でも、痛みは和らぐ。いいかい？ 放っておくと腫れ上がってき、刺されたところが壊死する人もいつから」

船頭が金属のボウルに湯をソソいだ。

「さあ、お客さん、やってみようか」

文彦は右手で左の腕をつかみ、手のひらを湯にもぐらせた。声が漏れそうになる。

「いずれにしろ、船が港に着いたら病院に行つてね。あと二時間ほどで港に戻すから」

いつの間にか文彦の全身から脂汗が噴き出していた。額から、顎から落ちる。呼吸もいきなり浅くなったように思う。文彦は船頭に礼を言うと、そのままそこにへたりこんだ。

「ひこさん」

良太が横に並んで腰を降ろした。

「痛い？」

「うん。オニってやつぱりすごいな」

へ 中 略

鉄の棒は相変わらず左腕を刺し抜いていた。じんじんと痺れがきて、時折どうにも堪え難くなる。シオをかぶったように汗が滴り落ちる。

「ひこさん、帰ろう」

「そうだな。でも、他にもお客さんがいっぱい乗っているから。俺たち以外はまだ誰も釣ってないから」

「ひこさん」

「大丈夫だ。良太は釣りをしろ。もうやり方はわかったろう」

「うん……でも」

「いい。俺のことは気にするな。こうしてりや、じきに和らいでくるから」

本当にそうなのか、という表情で良太は文彦を見ている。

またそこに玲子が現われた。

良太の眼差しと、かつての玲子のそれが重なった。

へ 中 略 へ

「……良太」

「うん？」

「自分の獲物を見てこい。作文書かなきやいけないんだろう。オニが生きているうちによく観察しろ。ただし絶対に触るな」

そこで初めて文彦は笑顔を作ってみせた。

良太は頷くと、文彦に視線を残しつつ立ち上がった。そして、二匹のオニを放りこんだタライの方へとゆっくり歩いていった。

文彦はその後ろ姿を追いながら、何度も深呼吸をした。

そしてゆっくりと目を閉じた。

まぶたの向こうに、相模湾の光があった。

玲子がまだこつちを見ている。「大丈夫？」と囁いた。

「はあ？」

涙と鼻水でぐしょぐしょになりながら、怪訝な顔の船頭に向かっていく。

⑥「友達です」

「いいから、良太！」

泣きじゃくる良太を背後から抱え、文彦は釣り客全員に声をかけた。

「すいません、どなたがお湯をお持ちじゃないですか」

釣り座に着いたままの客もいれば、様子を見にきた客もいた。みな気の毒そうに首を振った。

「しょうがねえ。帰ってやれよ」

常連らしき年配の客からそう声がかかったところで、船頭は唇を噛んだ。

「みんなに謝ってよ。お客さんのせいなんだから」

「すいません」

「とにかく病院に連れてかなきゃ」

文彦は釣り座まで良太を引っ張っていき、その横にボウルを運んだ。さっきまで自分の手を浸していた湯に良太の指を突っこませた。

自身がたった今経験したことだ。その痛みを思えば、掛ける言葉がなかった。ただ背中をさすってやることしかできない。良太は片方の長靴を脱ぎ、立たせた膝に顔を付けていた。そうやって泣き続けた。

操舵室からは、船頭の無線の声が聞こえてくる。

「親子でオニに刺されちゃったんで。あ、いや、親子じゃなくてね、親子みたいな大人と子供が刺されたんだよ。あ？ よくわかんねえよ、どういう二人連れだか。とにかくね、至急戻るんで、車を用意しておいて」

そうだ、謝らなくてはと文彦は立ち上がった。腕を片手で押さえながら、右舷の客、左舷の客の一人一人に頭を下げて歩いた。たいていの客は心配をしてくれたが、中には無然とした表情で文彦を見ようとしなかった。最後に頭に下げにいったのは舳先の客だった。最初のオニをタモ網ですくつ

あつ。

突くような短い悲鳴が聞こえたのはそれからすぐだった。周囲の釣り客よりも早く文彦は立ち上がっていた。

良太はタライの前にいた。右の手首を押さえて中腰になっていた。

「どうした！」

良太は何も答えず、そのままがみこんだ。口を思い切りねじ曲げ、真っ赤な顔になっている。

「バカッ！」

思わず手が出そうになったが、文彦はその手で良太の腕を取った。

「どこをやられた」

体を硬くしているために腕が開かない。ただ荒く息を吸いこむばかりだ。そこを何とかこじ開けると、右手の人差し指が血に染まっていた。良太が自ら噛んで爪を失った指だ。血がだらだらと垂れている。

船頭が金髪を振り乱して近付いてきた。

「またなの」

「すいません」

体を丸めて良太が泣き始めた。噛み殺したかすれ声で、ごめんなさいと言おうとしている。

「お湯をまたもらえませんか」

「そうしてやりたいけどさ、さっきので使いきっちゃったよ。何してんだよ、あんたたち親子で！」

途端に良太が顔をあげた。しゃくりあげながら船頭を見た。

「親子じゃないです」

血だらけの指をぎゅっと握りしめ、半ば叫ぶように訴える。

「親子じゃないです」

てくれた釣り人だった。

「自分の監督不行届きで、今日は申し訳ありません。こんなことになって」

「あ、いや……実はこちらこそ」

その釣り人は道具を畳み終え、すでに煙草をくわえていた。そして、良太がオニカサゴに触るところを目撃したと告げた。もっと注意していれば良かったと言ひ、ひとことふたことを付け足した。

⑦文彦はそれを聞くと、思わず額に手をやった。

振り返って、良太を見た。

(明川哲也「オニカサゴ」)

問一 傍線部イホについて。カタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで記しなさい。

問二 傍線部①「作文書かなきやいけないんで」の後にはどのような言葉が続くと考えられますか。文中の言葉を用いて、解答欄の形式に合うように十字以内で答えなさい。

問三 傍線部②「行きたくないって言ってる」とは魚のどのような様子を表した言葉ですか。次の文の空欄に当てはまる語句を、文中から五字で抜き出しなさい。

魚が している様子。

問四 空欄 ③ に当てはまる語を文中から二字で抜き出しなさい。

問五 空欄 A 〽 D に当てはまるものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア オニカサゴ イ 化けもん ウ 赤い子牛 エ 赤黒い影

問六 空欄 a・b にそれぞれ当てはまる漢字一字を答えなさい。

問七 傍線部④について。このような結果になったのは、文彦が何をしようとしたからだと考えられますか。十五字以内で説明しなさい。

問八 傍線部⑤「処理がまずくて」とは具体的にどうしていたことですか。解答欄の形式に合うように文中から二十字以内で抜き出しなさい。

問九 傍線部⑥「友達です」とありますが、なぜ良太はこう言ったのですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 親子ではないのに、それ以上の行動を自分に示してくれた文彦の友情が、とてもうれしかったから。

イ 父親のような愛情を自分に示した文彦に対し、二人は単なる友達にすぎないことをわからせようとしたから。

ウ 親子以上の行動を示した文彦の気持ちを理解しながらも、実の父親ではない悲しさを訴えようとしたから。

エ ほぼ同時に刺されたことを、親子似たもの同士の過ちとでも言いたいような船頭の言葉に腹が立ったから。

問十 傍線部⑦について。ここで文彦が「釣り人」から聞いたと考えられる内容はどのようなことですか。二十五字以内で答えなさい。